

# 絵巻に見る道路と交通の歴史

正会員 日本道路公団 藤田 美輝

A history of roads and transportation  
described in Emaki (picture scrolls)

## 概 要

わが国における道路交通史の研究は文献に重点が置かれ、この面では多くの成果が得られている。しかし多くの文献は、国史と称される資料である。国史は概して統治する側の立場で記録されており、一般の交通状況を把握するには、やや難点があると云わざるを得ない。

この点、絵巻はより具体的な記録として貴重なものである。また、実感としてとらえることができ、道路と交通の技術的な史資料として極めて示唆に富む内容を含んでいる。

この絵巻をもとに平安末期から主として鎌倉時代における道路と交通の実態を探り、特に一般的な生活の中における道路の状況、橋の様子、牛車（荷物運搬用）の利用に着目し、従来の研究では、あまり触れられていない面に関して、考察を試みたものである。

また交通の基本的機能と当時の交通実態との関連を対比し、歴史的な変遷の過程について若干の推論を行った。

(中世、交通、道路)

### 1 交通の発展過程から見た中世

わが国の歴史は、ある時期には外国から文化を導入し、またある時期においては、わが国独自の文化を発展させてきた。それぞれの時代の節目には、大きな社会的変革を経たことは勿論であるが時代の変革期には、その前後に大きな土木事業が行われている。各時代の一見、文化の停滞しているように見える長い時期も次の時代へ向けて基盤を醸成した時間であり、いろいろな事業が地域的な広がりを見せ、いわゆる地域作りが不断に行われて来たことを見のがせない。

道路と交通の歴史は各時代の社会的状況を背景にその制約を受けると同時に、時代変革への強力なインパクトを与え、相互に作用しながら進展してきたものと言える。

絵巻に描かれた中世から、我々が一般的に受けるイメージは、実に混沌たる文化の停滞した暗い時代としての印象が強い。

しかし大陸文化の導入によって花開いた奈良平安

の文化も、畿内など特定の地域に限られた貴族文化であり、全国的な視野で眺めると、経済活動は全体としてまだ低位な時代であった。荘園の拡大貴族の政治的たい廃により、やがて源平の争乱を経て武家政権たる鎌倉幕府の成立へと進んだ。

鎌倉幕府の開設は政治経済の面において、従来わが国に見られなかった東西二つの核を形成し、この点においても歴史的な意味は大きく、とりわけ交通の面では新たな時代に入ったと言える。

さらに時代の経過とともに守護、地頭、地方豪族が各地方でそれぞれ地域経営を強化し、次第に力をつけた。その結果、鎌倉政権は相対的に地盤沈下し、南北朝、室町の時代を経て戦国の動乱へと中世は展開した。戦国時代は地方の経営を一段と強化させ、地方都市としての城下町を形成させた。これは交通の面において二極化からさらに多極化へと全国的な展開を促したと見ることができる。このような中世の前期に描かれた絵巻をもとに道路と交通の実態に注目し、考察を加える。

## 2 絵巻とその史料性

絵巻はわが国に仏教が渡来し、大陸の文化がぞくぞくと流入した奈良時代に経典等とともに中国から入ってきた画卷を母体として、平安の中頃、大和絵の描法と相まって発展してきたものとされている。

平安後期に様式、内容のうえで多様性を加え、鎌倉時代に入り質量ともに隆盛期を迎えた。しかし室町時代には、宋元系統の純鑑賞画が興隆を見るに至り、大和絵は順次衰退し絵巻も描かれなくなった。絵巻には源氏物語絵巻に代表されるように情緒的な画面効果に優れている色彩を主とした画風のものと、鳥獣人物戯画のごとく描線によって生き生きとした運動性を強調する画風のものとがある。しかし多くの絵巻は色彩と描線のどちらにも重点を置いた折衷的な形態のものである。絵巻の隆盛とともに絵の題材も豊富になり当時の生活周辺の事物をかなり写実的に描いた作品も多数

みられる。特に一遍上人絵伝などは遊行の場面が多いため、当時の地方の風物や生活の様子が画面に次々と展開しており、貴重な考証材料を提供している。

歴史の資料による研究は文献による考証と考古学のように遺物から類推的に考証する方法に大別される。しかし従来の研究は文献考証に重点が置かれ、なかんずく戦前までの研究は国史と称される資料にもとづく研究が多く、一つの体系をなしている。貴重な研究成果ではあるがやや偏重のきらいが否めない。文献による考証の最大の限界は、そこに記録された事物なり行為なりを具体的にみるできないところにある。この点、絵画資料は実感的に捉えることができる好都合な資料といえる。しかし特定の研究課題に関しては文献に比べ、その事物が直接描かれている場面の数は限られている。

表－1 絵巻に描かれている道路と交通に関する事物の内容別分類

| 絵巻名      | 世紀 | 時代 | 道路、交通等 | 橋等    | 車等        | その他    |
|----------|----|----|--------|-------|-----------|--------|
| 信貴山縁起    | 12 | 平安 | 旅の風俗   | 道路    | 板橋        | 塞の神    |
| 伴大納言絵詞   | 12 | 平安 |        | 岩橋    |           |        |
| 鳥獣人物戯画   | 12 | 平安 |        |       | うし車       | 材木運搬   |
| 粉河寺縁起    | 13 | 鎌倉 |        | 橋     |           |        |
| 当麻漫茶ら縁起  | 13 | 鎌倉 | 駄馬 山道  |       |           | 大工仕事   |
| 一遍上人縁起   | 13 | 鎌倉 | 道路通行一般 | 橋 舟橋  | うし車       | 生活風俗一般 |
| 北野天神縁起   | 13 | 鎌倉 |        | 板柵と橋  |           | 大工仕事   |
| 男ぶすま三郎絵詞 | 13 | 鎌倉 |        |       |           | きゅう舎   |
| 伊勢名所絵巻歌合 | 13 | 鎌倉 |        | 三径間板橋 |           |        |
| 長谷雄草紙    | 14 | 鎌倉 |        |       | うし車（車輪）   |        |
| 絵師草紙     | 14 | 鎌倉 |        |       | 文車        |        |
| 稚児観音絵巻   | 14 | 鎌倉 |        | 橋     |           |        |
| 石山寺縁起    | 14 | 鎌倉 | 通行 馬借  | 橋一般   |           | 風俗一般   |
| 法然上人絵伝   | 14 | 鎌倉 | 道路 通行  |       | 車舎        | 柴垣囲 石垣 |
| 小野雪見御幸絵巻 | 14 | 鎌倉 | 荷駄     | 板橋    |           |        |
| 住吉物語絵巻   | 14 | 鎌倉 | 土橋     |       |           |        |
| なよ竹物語絵巻  | 14 | 鎌倉 |        |       | 文車 牛車のけん引 |        |
| 慕婦絵詞     | 14 | 鎌倉 |        |       |           | 生活風俗   |
| 年中行事絵巻   | 14 | 室町 | 通行一般   | 橋     | うし車       | 行事風俗   |

### 3 絵巻に描かれた道路と交通関係事物の内容

絵巻に描かれている道路と交通に関する事物を内容別に分類したものが表-1である。但し乗用の牛車(ぎっしゃ)は、多くの絵巻に出てくるので掲載を省略した。また、橋については、地方や市井に見られるものを対象として掲載した。

### 4 絵巻に見る道路と交通の諸相とその考察

#### (1) 道路について

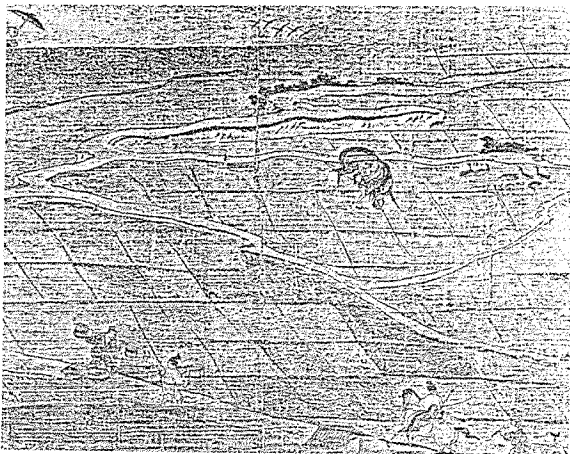
絵巻では道路を二本の輪郭線で描いている例は極めて少ない、これは絵師の性格や画法の特徴にもよるが、道路そのものが二本の輪郭線で描くような形として意識されなかったことに起因しているように思われる。

橋等は事物自体がはっきりとした外縁を有しているが道路は性格上それほど判然としないのは当然である。しかし当時の大多数の人々にとって道路は二本の線で挟まれた幅をもった施設として意識されることは少なかったのではないかと思う。

車行を伴わない歩行、騎行主体の交通にとつては、特に支障がなければ現在の道路のような区域をもった施設である必要はなかったであろう。田畑、建物などの無いところで交通可能なところが通路として利用されたものであろう。

図-1は一遍上人絵伝にえがかれている道路である。条里田の区画された中に曲がりくねった道が描かれている。

図-1 一遍上人絵伝



このような情景は他にも例を見ることができる。

また、例えば山形市の西南部の条里区割を見ると道路の部分で区割線がずれている事例もある。

自然に踏み固められてきた道路は条里制の区割によって消滅したものではなく従前の位置で保全され、その後永く受け継がれ現代に至ったものも少なくないのではないかとと思われる。改築前の国道などにおいて曲がりくねった松並木の道路が見られたのも、古い時代からの踏み固め道が名残をとどめたものではないだろうか。

図-2では、石が道路の端へ除けられている。足を痛めないように、また騎行の場合も当時、蹄鉄は使用されておらず、蹄を傷つけないように路面の石を取り除いたものであろう。このような情景は他にも数例見られる。

図-2 一遍上人絵伝

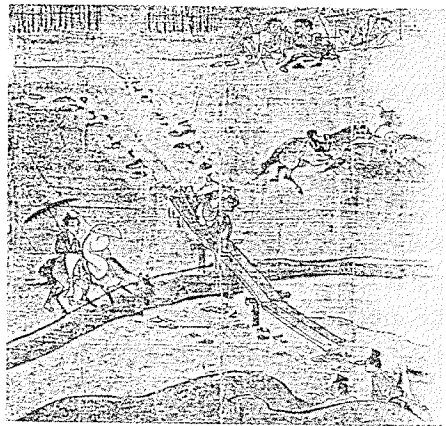


図-3 当麻漫茶ら縁起



図一3は山路でのさん道である。地山の硬い山地では道路の開削は極めて困難だったと想像され、このようなさん道を設けたものであろう。

図一4 石山寺縁起



図一4は石山寺縁起に描かれた馬借の様子かと思われる。当時の雰囲気が見事に描かれている。

#### (2) 車行について

牛車には乗用の牛車（ぎっしゃ）と荷物用のうし車とがある。屋形と荷台を除けば構造的には全く同一のものである。この牛車も畿内の一部をのぞいて、ほとんど利用されることがなかった。

わが国においては馬車の利用は近世に至るまで見ることはできない、日本の在来馬が小型であり大型馬への改良は中世の後期以降とされている。このため、けん引力の小さい馬では馬車の発達は困難であったと思われる。

車行の発達しなかった一般的な理由として、平地にあっては、多雨のため河川が多いこと、また山地の多い国土であることが上げられている。これらの要因は車行発達を制約するものではあるが、より効率的な輸送は、いつの時代でも求められるものであることを考えると、ほとんど改良もされずに衰退したのは、不思議に思えてならない。この点に関して若干の考察を試みる。

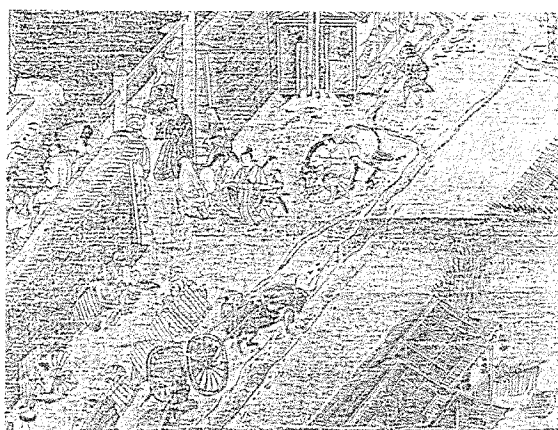
先ず第一に牛車のけん引の方法に一因があると思われる。牛車のけん引は牛の背骨の隆起に首木を紐で固定し、ながえを介して車を引く方法によっている。ながえは、かじ棒とけん引棒の役目を兼用している、この方法は、けん引力を十分に

発揮できるとは思えない。絵巻で見る限り、うし車の積荷は駄送の三倍程度と思われる。

牛車（ぎっしゃ）は乗用には違いないが交通車両としての機能よりも、むしろ儀礼上、格式保持のために公家が京内に限って利用したものであり、室町時代を過ぎると公家の没落とともにほとんど利用されなくなった。荷物用のうし車も牛車の衰退と運命を共にしている。

車行のもう一つの阻害要因は路面の問題であろうと思われる。荷物を積み込んだ時は、たとえ小さな水路の横断でも容易ではなかったと考えられ、また雨や雨上がりなどの時は、軟弱な土砂路面はぬかるんで車行に耐えなかったと思われる。

図一5 一遍上人絵伝



図一5は門前通りの場面である。排水路が路面を縦横断しており、ところどころに歩行用の板が架けられている程度で車の通行を配慮したような道路の情景ではない。

うし車は相当高価なものであり、車両の維持費も必要である、ところが積荷の量はそれほど多くできず、小回りも面倒なことから、うし車を利用するメリットは少なかったように思える。うし車の利用が他の地域へ広がりを見せなかったことから察すると、あるいは乗用の牛車で古くなったものを荷物用に流用したかと想像される。

さらに一点、車行のためには路面は土砂道ではなく、砂利混じりの硬い路面である方が望ましい、しかし他方、騎馬にとっては、蹄鉄が当時利用され

ていないため、蹄の保護を考えると砂利道は適しない。武士の台頭は騎乗を優先するため、車行はこの面からも成立しがたいことに注意する必要がある。

牛車の車輪について以下に若干の考察を加える。牛車の車輪は鉄帯様のものでなんらかの補強がなされていたのではないかとの見方があり、渋沢敬三氏も「常民生活絵引」の中でそのように述べている。図-6は長谷雄草紙の一場面である、大きな木の根方にある荷車は轡を構成する部材の線が明瞭に描かれている。この絵の車輪は鉄帯様のもので補強されているようには見えない、合わせ釘で木製の部材を組み合わせたものであろう。

図-6 長谷雄草紙

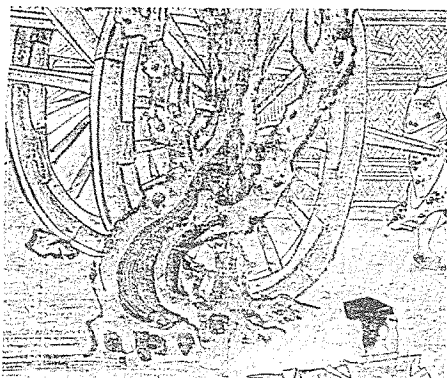
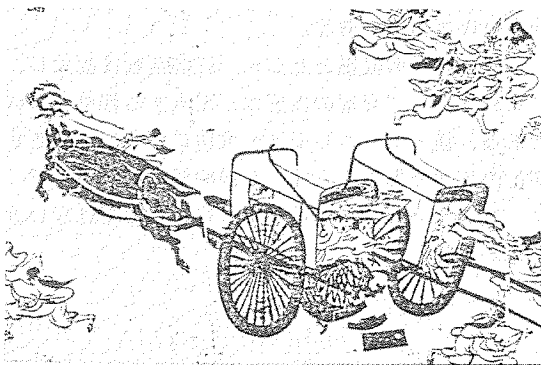


図-7は年中行事絵巻、稲荷祭りの行列、七条大路の路上である、牛車同志の接触により、車輪の壊れた様子が描かれている。この絵においても輪縁の補強はないように見える。上記のことから当時の牛車には鉄帯様の輪縁補強はなかったのではないと思われる。

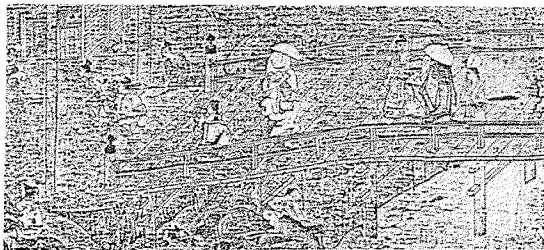
図-7 年中行事絵巻



### (3) 橋について

京内における大橋や神社仏閣の参道に架かる橋は多くの絵巻に、ぎぼうしを備えた朱塗りの反橋や立派な平橋として相当数描かれている。これは当時の架橋技術がかなりの水準であったことを物語っている。図-8はその一例であり、四条大橋を描いたものである。

図-8 一遍上人絵伝

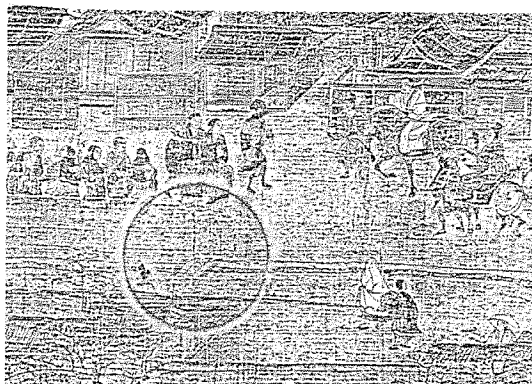


これに対し地方や市井の水路に架かる橋に着目すると、多くの絵巻に共通して描かれているのは、人の歩行に耐える程度の板橋である。図-9に示すような橋が一例である。これらの橋には丸太ではなく割板が用いられている。図-10は土橋であり、この形の橋も絵巻にかなり描かれている。丸太を数本渡して、そだを横に敷き詰め、土を被せ、その上に歩み板を乗せたものと考えられる。端に見える房状の表示は、そだの端を描いたものかと思われる。図-11は粉河寺縁起に描かれた橋であるが、地覆の一部分が反り上がっている。同じような形のものが住吉物語絵巻にも描かれている。この地覆部は土砂の流失を防止するためのものと考えられるがどのような構造のものか判然としない。多くの橋に丸太ではなく板材が用いられている点は興味深い、この時代まだ縦引鋸は普及しておらず割板を用いたものである。割板の技術が相当普及し、今日、我々が想像するよりも割板は容易であったかと思われる。

図-9 一遍上人絵伝



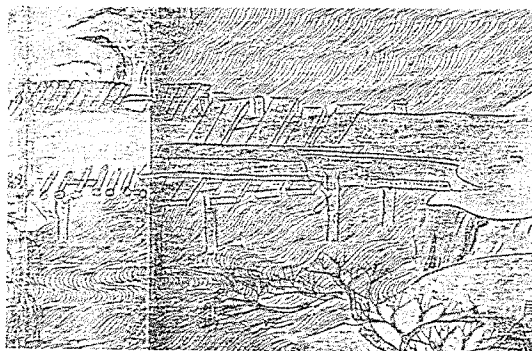
図一 10 一遍上人絵伝（円内・土橋）



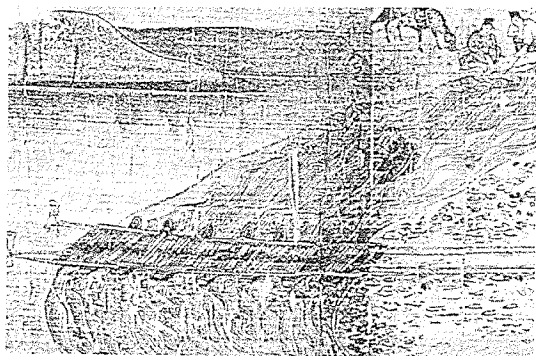
図一 12 一遍上人絵伝



図一 11 粉河寺縁起



富士川の舟橋（一遍上人絵伝）



#### （4）道路の付属物について

絵巻には並木や塚、道祖神のような付属物はほとんど見られない。図一 12 は一遍上人絵伝の一場面であるが土塚と松、杉、柿の木がランドマーク的に描かれている。左側の土塚は地山のようなものである。

この絵巻には他の場面で木製の卒塔婆が路傍に数例描かれている。古くから文献に見える塞神は信貴山縁起に一例見えるのみである。明治以前日本土木史に述べられている都城の並木については、柳が路傍のところどころに散見されるのみで並木といった感じには描かれていない。

これらのことから当時の道路の路傍には今日我々がイメージするような並木や道祖神などの付属物はそれほど多くなかったのではないとかがえられる。並木や石造物は主として室町時代以降、旅の増大につれて路傍を賑わして行ったものと思われる。

#### 5 交通の歴史的変遷に関する若干の考察

交通の制度あるいは施設に求められる基本的な機能は、迅速で経済的に、安全で快適に、人や物が発生地から目的地へ、自由に移動できることである。このような交通の基本的機能は、時代の変革によっても不変の特性であろう。また交通の形態は、その時代の技術の水準や交通需要の質と量に、支配されて進展するものであるが、その時代を取り巻く政治や経済、社会環境によって左右されることは、時代が古いほど濃厚である。

一般に時代の経過とともに、経済活動は拡大し、これに比例して交通の需要は、増大する性格のものである。従って、もし交通の機能に本質的に根ざす制度や施設であるならば、発展的解消はあるにせよ、衰退ないしは崩壊は起こり得ないのではないかとと思われる。

古代駅制の崩壊は、荘園の発達に大きな要因があるとされている。しかし荘園の発達は、駅制衰退の社会的要因として理解できても、交通需要を低下せしめたとは考え難い。土地を国家に帰属せしめた律令体制のもとに確立された駅制は、中央権力の及ばない私有土地を形成する荘園の拡大により、その制度が崩壊せざるを得なかったものである。

交通の基本的要素として「自由に」ということは、誰もが制約なしに自由な時間に利用できるということを意味する。この面で古代駅制を考えると、これは官用独占の制度であり、自由さが全くみられない。ここにその崩壊の主因があると言える。

また古代の畿内における大規模な直線道路や幅員の宏大な都大路が、なぜ遺構と化したか、交通の機能面から推論を試みるならば、それは当時の交通需要から生じた交通施設ではなくて、都の建設の上で唐の都を模倣して作られたものである。交通の実態とかい離した政治的な施設であったがゆえに、時代の経過とともに無用の長物と化し、田畑宅地の利用に侵食されたと云うべきである。

#### おわりに

以上、小さい図はんの例示で若干の考察を試みたが、検討に待つ内容が多い、今後、より多くの例証を吟味し、当時の様相が少しでも詳らかになればと考えている。

#### 参考文献

- 東京国立博物館絵巻物特別展図録 s 4 2  
日本絵巻大成 小松茂美 編 s 5 3  
中央公論社  
日本常民生活絵引 渋沢敬三 編 ' 8 4  
復刊 平凡社  
国宝絵巻 奥平英雄 s 4 9 保育社  
一絵巻物に見る一 日本庶民生活誌 宮本常一  
s 5 6 中公文庫  
絵巻物と民俗 五来 重 ' 8 1 角川選書  
明治以前日本土木史 s 1 1 土木学会  
道の文化 山田宗睦他 s 5 4 講談社  
騎行 車行の歴史 加茂儀一 ' 8 1  
法政大学出版局  
古代の交通 田名網 宏 s 4 2 吉川弘文館  
鎌倉時代の交通 新城常三 s 4 4 吉川弘文館  
体系日本史叢書 豊田 武、児玉幸多 編  
流通史 s 4 4 山川出版社  
交通史 s 4 5  
講座 日本技術の社会史  
交通 運輸 ' 8 5 日本評論社  
技術の歴史 C. シンガー他 ' 7 8 筑摩書房  
日本土木史研究論文集 (第一回―第五回)  
' 8 1 - 8 5 土木学会